



AUE News

2010年12月1日

第 5 号

編集・発行
愛知教育大学広報部会
TEL 0566-26-2738
FAX 0566-26-2500



目次

- 行事予定(12月1-15日)
- トピックス
- ・学内講演会
- ・学長が国会議員に要望
- ・春日井西高校の保護者らが本学を見学
- ・秋祭
- ・大学改革シンポジウム
- ・消しゴムスタンプ作り教室
- ・役職員永年勤続者表彰式
- ・イルミネーション点灯式
- ・キャリア支援・就職支援に関する研修会
- ・秋のランチコンサート
- ・総合防災・防火訓練
- ・グローバル英語講演会
- ・附属図書館で宝石の原石展
- ・全学会議で会議廃止を決定
- ・第1回愛教大アカデミックカフェ
お知らせ・報告・投稿
- ・ばね産業新聞で紹介
- ・本学に滞在中のインドネシア研究者
- ・中部国際空港見学
- ・富山大が薬品管理で支援
- ・ピアノとチェロのデュオコンサート

行事予定(12月1-15日)

- 1日(水) 代議員会(13:00~ 第五会議室)
学生支援委員会(代議員会終了後 第五会議室)
教務企画委員会(13:30~ 第二会議室)
大学改革推進委員会(15:30~ 第三会議室)
- 4日(土) 愛知教育大学地域連携フォーラム2010(13:00~ 大学会館)
- 7日(火) 役員会(13:00~ 学長室)
- 8日(水) 代議員会(13:30~ 第五会議室)
教育研究評議会(代議員会終了後 第五会議室)
- 10日(金) 第6回経営協議会(13:00~ KKRホテル名古屋)
- 12日(日) 冬の子どもまつり(9:00~ 第一共通棟ほか)
- 14日(火) 役員部局長会議(13:00~ 学長室)
- 15日(水) 教育創造開発機構委員会(9:30~ 第五会議室)
教員人事委員会(13:30~ 第五会議室)
安全衛生委員会(16:40~ 第五会議室)

トピックス

学内講演会(11/17)



学校法人河合塾の近藤治教育情報部長による講演会が11月17日(水)、第五会議室で開催された。教職員を対象にした研修の一環で、約60人が参加。近藤氏は「教員養成系における入試動向及び予測」をテーマに約1時間40分、熱弁を振るった。

松田正久学長が「本学は志願者を増やし、優秀な学生を迎えたい。競争激化の中で学生がきちんと教員になり、

生涯学び続ける動機づけが重要で、今回は情勢に詳しい近藤部長に講演をお願いした」とあいさつ。鏡山典子人事課長の講師紹介のあと、講演に移った。

近藤氏は参加者に配布した資料に基づいて河合塾のデータを解説。2010年度の国公立大、私立大の入試結果や「東海地区受験生の教員養成系大学受験状況 愛知教育大学を中心として」「2011年度入試志望動向」など項目ごとに詳細に分析しながら話を進めた。近藤氏は「立命館大学は大学入試センター試験の利用を含めて163種の入試方式を採用しており、私立大学は3万円の受験料で何回でも受験できるなどあらゆる方法を探っている。生かせるチャンスは生かすのが最近の高校生」と激化する学生確保競争を指摘。本学を中心とする教員養成系大学の今後について様々なデータを分析した結果として 資格志向と地元志向の高まりを主要因としてこの2年間の大学志願者は増加傾向を示す 愛教大の受験動向は高い教員採用率に支えられて人気上昇 高校教員は教員採用率に大きな関心を持っている などと本学や学生の可能性を高く評価した。その一方、教員養成系志望者のうち成績優秀者は他地区難関大へ入学する 来春の教員養成系大学の志望者は増加するが、ゼロ免課程は対照的に大幅減少する との厳しい見方があることも示した。近藤氏の話は受験生の動向や本学学生の資質について外部から見た新鮮な情報ばかりで、参加者は熱心に聞き入っていた。



学長が国会議員に要望(11/18)

本学の松田正久学長は11月18日(木)、東京の衆参議員会館で国会議員への要望活動を精力的に行った。来年度予算の国立大学運営費交付金が依然不透明な中、教育大学である本学の現状を理解してもらい、運営費交付金削減阻止へ向けて行動してもらおうと訴えるのが目的で、この日は愛知県選出議員ら国会議員9人に会い、直接説明要望を伝えたほか、秘書を通じて議員5人に要望書を渡して大詰めを迎える予算編成への理解と協力を求めた。



時折、走りながら議員会館回りをこなした学長は「最後まで可能な限りの手段で予算確保の努力を続けなければ」と話していた。

学長が面談した議員は鈴木克昌総務副大臣(愛知14区)、近藤昭一環境副大臣(愛知3区)をはじめ民主党陳情対策本部や党政調高等教育ワーキングチームの議員ら。山尾志桜里衆院議員(愛知7区)の紹介で会った兵庫県の石井登志郎衆院議員は学長に「コンクリートから人へ(の予算)に私たちの存在価値がかかっている」と教育予算確保への決意を語り、ほかの議員もそれぞれ「国立大学による教育の機会均等は重要」「教育への(国の)投資が少ないことを学生や若者も気づき始めたのでは」「親の年収に大学進学率が比例するような格差はいけない」とした。また、本学OBの齋藤嘉隆参院議員も学長の説明に理解を示すとともに「(交付金削減で)教育大学が特に大変であることは多くの議員の声でもある。私も教育予算について議員としてできることはやった」と述べた。限られた時間の中で



春日井西高校の保護者らが本学を見学(11/19)

春日井市の県立春日井西高校の保護者らによる本学見学会が11月19日(金)午後に行われた。一行は同校の生徒の保護者と元廣益枝校長、進路指導の大澤美紀夫教諭ら約40人。バスで本学に到着後、第一共通棟423室へ。大学案内を基に、大学の概要をはじめ、入試や就職状況など



が、それぞれ担当の事務職員から説明され、真剣な表情で耳を傾けていた。

続いて、学校設備を見学するため、附属図書館へと移動。図書館司書の案内で、二手に分かれて書庫や学習室などを見学した。見学時間は約2時間と足早の行程だったが、保護者からは「直に大学を見ることで、雰囲気や学生たちの大学での過ごし方がわかって、よかった」「愛教大なら4年間、勉強に集中できそう。子どもを通わせたい」などの声が聞かれた。

秋祭(11/20, 21)

恒例の秋祭が11月20日(土)、21日(日)の2日間開催され、キャンパス一帯でスポーツや音楽ライブ、ミニゲームなどのイベントが行われた。

今年のテーマは「秋祭 2010 Ai kyo shout! ~秋空にとどろけ、祭の祝砲~」。体育館では“スポ祭”として、バスケットボール、バドミントン、バレーボール、グラウンドではサッカーやソフトボール、ドッジボールなどの試合がそれぞれトーナメント方式で行われ、学生たちがグループで参加。秋晴れの下、歓声を上げながら、ゲームに汗を流した。



附属図書館前の階段には特設ステージが設けられ、20日はピアノ演奏、ダンス、落語研究会の漫才、オカリナ演奏など、21日には11組のバンド演奏が行われ、多彩なパフォーマンスで観客を楽しませた。

また、第一、第二共通棟の間、トレーニングセンター前では、体力測定や「スリッパ飛ばし」などのミニゲームが繰り広げられ、附属図書館前ではたこ焼きやおでんの出店や落語研究会の寄席も登場し、人気を呼んでいた。

大学改革シンポジウム(11/20)

愛知教育大学と国立大学協会の共催による「2010大学改革シンポジウム」が11月20日(土)午後、名古屋市中区のホテルで開催された。テーマは「大学院での教員養成をどうとらえるか」で、大分、新潟県からの参加を含む学生、教職員ら約70人が出席。「4(年)+」など「教員養成の高度化」のあり方が注目される中、参加者は教育大学の役割や教員の将来像などに思いを巡らしながら講師やパネリストのデータ分析、見解、議論を興味深そうに聴き入っていた。



愛知教育大学の折出健二副学長の総合司会で開会。松田正久学長が「教員養成や教員の専門職化の課題は何か、わが国の高等教育のあり方について充実した議論が行われるよう期待したい」とあいさつ。折出副学長がシンポジウムの趣旨、スケジュールなどを説明した後、渡邊倫子文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長による講演に移った。渡邊氏は「教員養成への期待」をテーマに教員採用者、大学の教職課程の現状や学校現場が抱える課題などを資料に基づいて説明。多忙化する教員の自主研修時間が大幅に減少した実態や教職大学院の概要、認証評価などを分かりやすく解説し、国立教員養成大学が大学改革のモデルとなることが期待されている、とその重要な役割を強調した。



休憩を挟んでパネルディスカッションが行われた。パネリストは梅澤収静岡大学教授，佐久間亜紀上越教育大学准教授，松田学長の3人で，コーディネーターを愛知教育大学の子安潤教授，後藤ひとみ教授が務めた。

梅澤氏は教員養成系学部から見た実践的な課題を挙げるとともに，教員免許制・養成システムの改革について「教師の職能成長に対応した免許制度であるべきだ」と述べ，大学院での教員養成の具体的なイメージ図を示して提言した。佐久間氏は「文科省のアンケートで保護者が見た子どもの先生の評価は85%が“よくやっている”だった。今日の教育問題の責任は先生にありとは言えない。4+の制度改革だけで教師の質が向上するとは限らない」と指摘。教師教育の高度化をめぐる民主党案を様々な視点から検討を加えて「目的はいいが，手段・方法，前提条件に問題がある」とした。松田学長は大学院における教員養成について本学の歴史，経緯，入学者数，修了者の進路などをデータで解説。「教員の専門職化は10～30年先を見据えたグランドデザインが必要。アジア各国を視野に入れた国際的な標準化の検討や国としての投資により国が責任を持つ制度改革であるべき」などと見解を述べた。



討論の後，会場からは質問や意見が出され，3時間の予定を約20分オーバーして午後5時前に終了した。

消しゴムスタンプ作り教室(11/21)

刈谷駅前商店街と本学のコラボ企画で開催された「藤田雅也 石彫展」の会場、スペースAquaで11月21日(日)午前、「消しゴムスタンプ作り」のワークショップが行われ、親子連れ約20人がスタンプ作りに挑戦した。

指導したのは、本学卒業生で名古屋経済大学短期大学部保育科専任講師の藤田さん。同展の記念イベントとして、手軽にできる消しゴムスタンプ作りを企画。参加した親子連れはまず、自分の名前の文字スタンプ作りにチャレンジ。スタンプにしたい文字などのデザインをトレーシングペーパーに書いて反転させて消しゴムに写し、それを彫刻刀で慎重に彫って、オリジナルスタンプを制作。完成したスタンプに色を付けて押し、くっきり文字が現れ、子どもたちは思わず「ヤッター！」とガッツポーズ。



二つ目、三つ目を作る熱心な参加者もいて、知立市から訪れた親子は「面白かった。いろんな色でスタンプを押せば、バリエーションができそう」、地元刈谷市からの親子も「子どもと一緒に家でも作ってみたい」と、スタンプ作りを楽しんだ模様。

藤田さんは「消しゴムは柔らかいので簡単にできます。これからの季節はクリスマスや年賀状用に作るのもお勧めです」と、手軽な彫刻のスタンプ作りの指導に当たっていた。

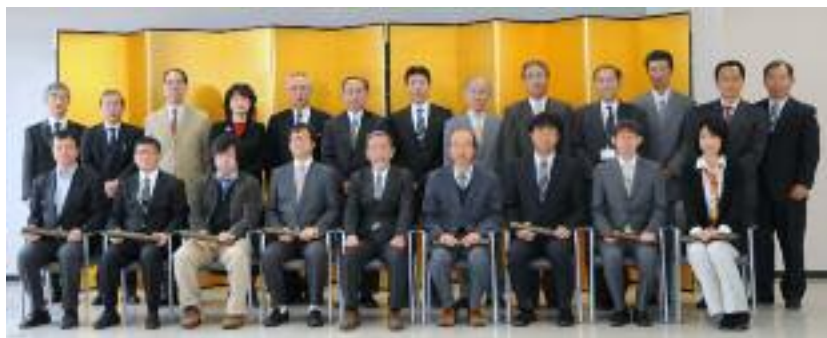
役職員永年勤続表彰式(11/22)

勤続20年の本学役職員を顕彰する役職員永年勤続表彰式が11月22日(月)、午前11時30分から本部棟3階の第五会議室で行われた。

今年度対象になったのは、教職員14人で、表彰式には8人が出席。鏡山典子人事課長による開式の辞で始まり、松田正久学長が表彰状の文面を読み挙げ、一人ずつに表彰状と記念品を手渡した。



今年の表彰の対象になったのは次のとおり。教員は大村恵（学校教育）、土屋武志（社会教育）、岩山勉（理科教育）、安田篤生（美術教育）、太田弘一（技術教育）、櫻木惣吉（養護教育）、伊藤貴啓（地域社会システム）、竹田尚彦（情報教育）、安本太一（情報教育）、寺中久男（理科教育）、事務職員は繁野哲（総務課）、井成浩文（教務課）、繁野美奈（附属学校）、大山良浩（学部支援課）の皆さん（敬称略）。



松田学長は「大学の将来を担っていただく方々。これからも、それぞれの分野でご活躍ください」とあいさつ。被表彰者を代表して太田教授が「もう 20 年かという感じがす。節目の年に、一層（職務に）励めとお尻を叩かれたという思い。少しでも愛教大の

ためにと努めたい」と謝辞を述べた。

この後、記念撮影が行われて、表彰式は終了。続いて第一会議室に場所を移して懇談会が開かれ、表彰された教職員は役員らと昼食を取りながら談笑した。

イルミネーション点灯式(11/23)

刈谷駅前を彩る「アクアモールイルミネーション」を今年も本学美術科の1,2年生の有志の学生たちが制作。11月23日（火）午後5時から、同駅前商店街アクアモールで点灯式が行われた。

本学の学生たちが同商店街と協力してイルミネーションの作成を手がけたのは今年が4年目で、50人余が参加。学生たちは夏休みから企画を話し合い、ミニチュア作りを経て、9月から2カ月余かけて学内で制作。今年のテーマは「宇宙」。美術教育の宇納一公教授のアドバイスを受けながら、地球や月、木星、ロケット、天の川、12星座など22種類のイルミネーションを金属やネット、木材など、様々な材料を利用して完成させ、11月21日（日）午前大学から会場までトラックで輸送し、商店街の歩道約500mの内の愛教大エリアに設置した。



学校6年生の子どもたちが作った灯りとコラボレーションしたのも見所です」とアピール。学生たちは輝く

この日は、商店街のイベント「カリアンナイト」も開催されて、点灯式はイベントの呼び物の一つ「ちびっ子プロレス」のリングを囲んで行われた。本学のアカペラサークル「プルミエ」が登場して爽やかなハーモニーを響かせ、会場を盛り上げた。その後、商店街関係者と一緒に松田正久学長や宇納教授、学生の代表がカウントダウンのコールに合わせてスイッチオン！夕闇迫る街をイルミネーションが一気に照らして、通りは幻想的な雰囲気包まれた。

制作に参加した1年生の瀧波満里香さんは「商店街の歩道に飾るので昼も夜もきれいで、強度もあり、雨にも耐えるものをと苦労しました。

今年は大きな作品が多く、初めて刈谷市立かりがね小学校と衣浦小



イルミネーションをバックに記念写真を撮るなどして、作品完成の喜びを仲間や街の人たちと分かち合った。

イルミネーションの点灯は来年1月21日(日)まで続けられる。

キャリア支援・就職支援に関する研修会(11/24)

本学の教職員を対象にした2010年度のキャリア支援・就職支援に関する研修会が11月24日(水)、第五会議室で開催された。村松常司理事が「本学におけるキャリア教育についての共通理解を深めるとともに、今後どうしていくのか、支援のあり方を考える機会になればありがたい」とあいさつ。高網睦美講師(学校教育)が「大学におけるキャリア教育とは～「職業指導」義務化の動きを受けて」をテーマに1時間余講演した。大学設置基準に社会的・職業的自立に向けた指導等に取り組む体制づくりが盛り込まれたこともあり、時宜を得た重要な課題であり、約20人の参加者は真剣に聴き入っていた。



高網講師は、かつて「職業指導」が学校教育に位置づけられて具体的な職業を指導したが、その後進学が増えて中学、高校では「進路指導」として広くとらえるようになり、今は小学校から大学まで「キャリア教育」をしようとする歴史的に名称が変化してきたと説明。若者の職業意識について具体例を紹介しながら「やりたいこと志向」の一方で社会人としての自信のなさや根拠のない自信を抱えていると指摘。様々な機関、団体から社会人基礎力、就職基礎能力、学士力、生きる力など社会人として必要な基礎的能力を意識したモデルが示され、その基礎能力を意識した学校教育が求められているとした。

その上で、本学におけるキャリア教育について「教師という職業に就くことを前提にした専門的、職業的能力を育成しつつ、より広い意味で教育に関わる専門的知識を学んでもらい、企業の中でも生かせる内容を学んだと、学生が語れるようにしたい。実習やセミナーだけでなく専門科目を通して学生がキャリアを実感できる状況が望ましい」と述べた。質疑応答もあり、キャリア教育の課題、本学の学生指導の可能性に認識が深まった様子だった。

秋のランチコンサート(11/24)



音楽科の学生による「秋のランチコンサート」が11月24日(水)午後零時40分から、附属図書館2階「アイ♥スペース」で開催された。

年に4回、シーズンごとに行われる同コンサート。今回は音楽教育の大学院生のステージが繰り広げられた。

プログラムは ピアノ連弾 グreek作曲 付随音楽「パール・ギユント」より「朝の気分」 二重唱

モンテヴェルディ作曲「幸いな道」 独唱 ヘンデル作曲 九つのドイツアリアより「心地よい静けさ、安らかな泉」 連弾 モーツァルト作曲 ソナタ kv. 521 第2,3楽章 三重唱 モーツァルト作曲 歌劇「魔笛」より 第1幕「さあ、死ねよ大蛇め！」 ピアノ独奏 ショパン作曲 華麗なる大ポロネーズ。

独唱では院2年・鈴木真衣さんのソプラノと、同・服部千尋さんのフルート、同・石橋克規さんのピアノが共演し、心地よい旋律を響かせた。連弾では院2年



生の五十嵐睦美さんと隈本浩明特別教授が登場、息の合った演奏に学生や教職員が耳を傾けた。

次回のランチコンサートは12月22日(水)、音楽教育講座の教員の出演により、クリスマスにちなんだ楽曲を予定している。

総合防災・防火訓練(11/25)

本学の2010年度総合防災・防火訓練が11月25日(木)午後2時40分から第一共通棟、第二共通棟、本部棟、各学系本館、附属図書館、講堂前広場で行われた。東海地震注意情報発表に伴う学内連絡及び授業の臨時休講、地震発生時の通報連絡、避難、消火などの訓練が目的。非常災害対策本部を設置、本部長を松田正久学長が、副本部長(消防隊長)を折出健二副学長が務め、学生約1000人、教職員200人余の計約1200人が参加して本番さながらの大規模な訓練が繰り広げられた。

地震発生非常放送を受けて、学生は共通棟から附属図書館前の広場に避難。附属図書館では3階で火災が発生したとの想定で救護、応援依頼、初期消火などの訓練が行われ職員の「火事だ」の叫び声が響き渡った。講堂前に設置された非常災害対策本部では、松田本部長から訓練の総指揮者に任命された折出副本部長の下に避難誘導班、自主防災隊などから確認、救出、消火の様子が刻々と報告された。その後、水が入った消火器の操作訓練を実施、学生や職員、学長、学系長らが的を目標けて水を噴射した。



最後に松田本部長が「東海地震は予知可能とされているが、いつ起きるかわからない。東南海地震との連動も指摘されている。こうした訓練は有意義で、皆さんは家族を含めた安全への意識を持ちながら、注意してほしい。今日のご苦労様でした」と講評して午後4時過ぎ、解散した。

グローバル英語講演会(11/29)

キャンパス・イマージョン・ルームの活動の一環として、「2010全国語学教育学会(JALT)大会」の基調講演者として来日したアラン・メイリー氏を迎えて、「グローバル英語：その影響、幻想、意味するところ」と題した講演会を11月29日(月)午後3時から、第二共通棟422教室で開催。学生や教職員計26人が参加した。

メイリー氏は、ブリティッシュ・カウンシルの派遣により、1988-93年の間、ユーゴスラビア、ガーナ、イタリア、中国、インドで英語教育の指導、1988-93年は英国の教育研究所、その後1998年までシンガポール、1999-2003年にタイで研究者の指導に当たり、現在はイギリスのリーズ・メトロポリタン大学教授。多数の著書、論文がある。

講演では、国際共通語としての英語のグローバルな広がりの実態について、ここ20年間の世界各地における言語状況の急速な変貌と人々の幻想と今後の展望について、自身の体験に裏打ちされた興味深いエピソードを交えて語った。また、国際共通語と地域語のバイリンガル話者が世界規模で増えている現状についても、豊富な実例を紹介。



メイリー氏は、長年、ノン・ネイティブ・スピーカーを相手に教育や講演を続けてきた経験の持ち主であり、聴衆が話を理解しているかをしばしば質疑応答を交えながらチェックし、わかり易い英語でゆっくりと話した。講演後、聴衆から質問やコメントが次々と出され、活発な議論や有意義なフィードバックが行われた。

附属図書館で宝石の原石展(11/29-12/24)



様々な色や形の宝石の原石を紹介する企画展示「宝石の原石展～誕生石の文化と科学」が11月29日(月)から附属図書館2階の「アイ♥スペース」で始まった。12月24日(金)まで。入場無料。

本学科学・ものづくり教育推進センターが主催し、宝石の定義や誕生石の起源、それぞれの石の生い立ちや特徴などを、分かりやすく紹介。原石標本 86 点も並

べられ、1月から12月までの誕生石の解説と合わせて実際の原石を観察することができる。

展示されている原石の中には、2007年に四国中央市で初めて国産ダイヤモンドが見つかった場所で採取したのと同じ種類の石、サボテン型や花形などユニークな形のアメシスト、ダイヤモンドより輝くガーネット、南米ボリビアの鉱山でしか採れないアメシストやとシトリンが混ざった「アメトリン」など珍しい原石もある。

展覧会を企画した同センターの佐々田俊夫研究員は、「石に光に当てると色が落ちるので、博物館などでは通常、暗い所で展示していますが、この会場では明るい場所での展示。より石の美しさが分かる、貴重な機会です」と同展ならではの見所をアピール。



期間中、展示品の説明会(12月4, 5, 12, 18, 19, 23日)や、勾玉(まがたま)づくりを体験する「宝石研磨教室」(12月19, 23日)も実施。時間など詳細は科学・ものづくり教育推進センターのホームページ(<http://www.step.aichi-edu.ac.jp/>)を、附属図書館の開館時間・休館は図書館のホームページ(<http://www.auelib.aichi-edu.ac.jp/>)を参考に。

全学会議の発展的解消を決定(11/29)

本学の第8回全学会議(キャンパスミーティング)が11月29日(月)午後4時40分から、本部棟3階の第五会議室で開催された。「全学会議規程の廃止」について協議した結果、規程廃止により同会議を発展的に解消し、今後は学生の意見などをより柔軟に聞く場を設けることとした。

会議には教職員約50人が出席。会議は内田良講師(学校教育)の司会で始まり、繁野哲総務課係長が「会議構成員が4700人余いるが、会議参加者は毎回百数十人。教育研究の充実という目的を達することは困難で、今後は役員会メンバーと学生との懇談会や教職員会議を行うことで支障は生じない」と規程の廃止理由を説明。松田正久学長も「2003年に制定された大学憲章の



理念は不変。総務課に様々な取り組みをしてもらったが、参加者は少なく、継続は難しい。不況が学生の生活を圧迫しており、学生との対話はよりフレキシブルに対応したい」と述べた。今後の懇談会の開催計画について質問が出され、学長が「年に2回程度開催したい」と答え、規程の廃止は了承された。

第1回アカデミックカフェ(11/30)

本学の「第1回アカデミックカフェ」が11月30日(火)、本部棟3階の第五会議室で開催された。今回は日本人2人が受賞した2010年ノーベル賞をテーマに、本学教授が物理・化学賞が何だったのかについて話す「科学の夕べ」に。参加者は中学生を含む市民、学生、教職員約50人で、コーヒーを飲み、リラックスした雰囲気の中で、教授の話に熱心に聞き入る姿が印象的だった。



午後5時からコーヒーを飲みながら雑談。「知の発信、貢献の一つとして企画しました」との松田正久学長の歓迎のあいさつに続いて三浦浩治教授(理科教育)が物理学賞にちなんで「グラフェンとその応用」と題して講演。受賞した研究の対象となったグラフェンとは何か、作り方やフラレン、カーボンナノチューブ、グラフェン、グラファイトなど「カーボンファミリー」を紹介。「グラフェンがどのように剥がれるかで鉛筆の書きやすさは変わるので今なおよい鉛筆をつくる研究が行われている。ヤモリが天井から落ちないのは強く貼り付きながら剥がれやすいから移動できる。グラフェンの剥がれ方と基本的なメカニズムは同じ」などとわかりやすく解説。また、教授の研究でもあるフラレン・グラフェン系が創る超

潤滑の世界にも触れ、会場からは質問が相次いだ。

コーヒーブレイクの後は化学賞にちなみ中島清彦教授(理科教育)が「カップリング反応をはじめとする有機合成反応や機能性材料の開発に関わる金属錯体の応用と基礎研究」をテーマに講演。教授は日本のノーベル化学賞受賞者の歴史を紐解き、様々な触媒でクロスカップリングを実現してきた日本人を含む研究者の研究論文のエッセンスを紹介しながら「穏やかな反応、条件で異なる性質のものを必要なところだけ炭素同士をつなぐのがクロスカップリング」わかりやすく説明。自身の論文もユーモアたっぷりに紹介しながら、2001年の受賞者、野依良治氏の研究などにも触れ、自身の研究である金属錯体を触媒とする有機合成反応も動画を使って楽しく紹介、約2時間の会が終了した。



松田学長が冒頭に紹介した「難しいことをやさしく、やさしいことは深く、深いことは愉快地に」(故井上ひさし氏)の名言を体現した会にとの思いが通じたのか、難解とされるノーベル賞の受賞理由が分かり説明され、和やかな会となり、最後には2人の教授に盛大な拍手が送られた。参加した豊田市の男子中学生は「カーボンの性質、多様性がわかった。これを研究すれば未来に使えるモノができそう。化学賞の話も面白かった」と笑顔で感想を語った。

お知らせ・報告・投稿

ばね産業新聞で紹介

本学の北村一浩准教授(技術教育)の講演内容が業界専門紙「ばね産業新聞」(8月20日号)に紹介されていた。一般社団法人形状記憶合金協会(会長・山内清東北大学教授)の講習会が7月2日(金)に大阪で開催され、7件の講演が行われたが、このうち北村准教授の講演のみがクローズアップされてこの業界紙に掲載されていたことがこのほどわかったもの。

記事によると、准教授は「介護用具、農作業補助具への応用開発と課題」をテーマに講演。長野県の会社と協力して製品化した事例を示すとともに、同社役員が膝用のリハビリテーション機

器の実演をするなどして開発状況を述べ、形状記憶合金の有効性を強調したという。「今後、本格的なりハビリテーション機器への応用が進む」との准教授のコメントも掲載され、同紙は「人に優しい形状記憶合金製品の開発に注目したい」と結んでいる。

本学に滞在中のインドネシア研究者(投稿)

インドネシアからの共同研究者、イナ・イカ・プラティタさん(写真:前列左端)が10月16日(土)から来年1月10日(月)までの約3カ月間本学に滞在、その間、川端康成の思想に影響を与えた日本の禅文化について、社会的・歴史的な研究調査を行っています。



11月9日(火)には、イナさんが松田正久学長を表敬訪問。イナさんは現在、本学の学術協定校であるインドネシア国立スラバヤ大学の言語芸術学部日本語学科で日本語講師を勤める傍ら、国立マラン大学の博士課程に在籍、「川端康成の著作における『美しさと悲しさ』の使い分けと日本社会の関係」という研究テーマの下、博士号の取得を目指しています。

表敬訪問には、受入共同研究者である社会科教育講座・土屋武志教授のほか、国立スラバヤ大学を卒業し、現在研究生として本学に留学中のインドネシア人留学生、スヤンティさんも同席。松田学長が、「滞在中は図書館なども利用しながら、日本文化や日本文学についての研究を深め、同時に本学の教職員や学生とも交流を深めていただきたい」と激励すると、イナさんは「素晴らしい環境の下で研究することができ、うれしく思います。この機会を与えて下さった松田学長、共同研究者の先生、そして愛知教育大学に感謝します」と笑顔で応えました。

(国際交流センター 宮内春菜)

中部国際空港見学(投稿)

企業活動と社会や経済の関係を知るために、「国際物流の拠点となる空港の役割」というテーマのもとで11月17日(水)午後に学生、教職員合わせて108人で常滑市の中部国際空港の見学を行いました。



当初は50人程度の参加者を予定しておりましたが、留学生を含めて応募が多く大型バスを2台に増やして希望者全員が参加できるようにしました。国際化が進む中で海外へ行く機会も増えており、学生の空港への関心の高さがうかがえました。

中部国際空港は約580ヘクタールという広大な埋立地に3,500mの滑走路を備えた24時間の離着陸が可能な空港で、年間の旅客数は約926万人、取扱貨物は約12万トン(2009年度実績)という巨大な国際空港です。

見学ではまず貨物地区に入り、空港の役割として大量の貨物も扱っていること、特に、製造業の多い愛知では製品の輸送に使われていることを知りました。巨大な輸送機によってボーイング787の主翼や胴体の一部などのパーツを運んでおり、グローバル化が進む中での国際分業について学びました。

その後、制限エリア内の空港の外周道路を一周して、空港のスケールの大きさや機能についても理解を深めました。滑走路のすぐ近くから航空機の離着陸を見ることができ、その迫力に圧倒されました。また、3分程度の間隔で頻繁に離着陸が行われており、管制管理能力の高さを実感しました。



最後に、旅客ターミナルを見学し、様々な目的で使われているセンターピアガーデン、航空機の離着陸が一望できるスカイデッキ、充実した商業施設を見ることができました。空港が旅客だけでなく地元からの訪問客を期待していることから、地域の中での空港の様々な役割を知りました。

中部国際空港は開港5周年を迎え、グローバル化が進む中で、中部地方の航空拠点として経済活動を支える重要な役割を果たしています。将来は益々機能を発揮することが期待されています。

今回の見学は翌18日(木)朝のNHKニュース『おはよう東海』で取り上げられ、中部国際空港と愛知教育大学の新たな取り組みとして紹介されました。

見学に当たり、中部国際空港株式会社 総務室 重田智啓様、伊藤淳一様はじめ関係者の皆様方にお世話になりました。心よりお礼申し上げます。(地域社会システム講座 水野英雄)

富山大が薬品管理で支援(投稿)

11月18日(木)、19日(金)の2日間、富山大学薬品管理支援システム TULIP (Toyama University Lab. chemicals InPut system)の開発者である富山大学水質保全センター川上貴教先生にお越しいただき、本学のTULIP本格的運用のための技術支援をいただきました。



TULIPとは、学内の薬品類の保管量・使用量・排出量の記録が学内LANを利用して一元管理できるシステムですが、本学との関わりとしては水質汚濁防止検討委員会が団体会員となっている大学等環境安全協議会技術研修会(2004年)で報告され、2つの化学系研究室で試運用されてきました。TULIPと市販されている薬品類管理システムとの大きな違いは、教育機関である大学が自らの組織に必要なツールとして開発されたものであり、薬品管理ツールとしてだけでなく、学生への環境安全教育支援ツールとしても運用したい組織の事情に合わせてカスタマイズできるという特徴があります。

カスタマイズできるという特徴があります。

薬品類の一元管理システム導入については、薬品類に関わる事故や事件が起こるたびに話題になってきましたが、2008年に本学の農機具庫からも特定毒物を含む多量の古い農薬の発見や、その他過去にさかのぼる薬品類の使用状況等の照会に即答できなかった反省を踏まえ、安全衛生委員会のもとに設置された『本学の薬品類管理のあり方を考えるワーキンググループ』会議により1年間かけて議論された結果です。現在、安全衛生委員会より委嘱を受けた薬品類管理システム導入プロジェクトチーム(チームリーダー:保健環境センター榊原洋子講師、TULIPサーバー管理、技術サポート:稲垣直英情報推進室長、システムアドミニストレーション:日野和之理科教育講座講師、遠藤透美術教育講座教授、加藤昌財務課長補佐、加藤正俊施設課長補佐、伊藤秀夫情報図書課長補佐)が進めてきた準備の最終段階にあたり、富山大川上氏には本学仕様のためのノウハウを伝授していただきました。(写真は右から富山大学川上氏、折出健二総務担当理事、榊原保健環境センター講師。保健環境センター会議室) (保健環境センター 榊原洋子)

ピアノとチェロのデュオコンサート(お知らせ)

音楽教育の武本京子教授が、12月6日(月)午後5時30分から、本学音楽棟演奏室でピアノとチェロのデュオコンサートを開催する。入場無料。



武本教授は12月19日(日)午後3時から、チェロ奏者の藤森亮一さん(NHK交響楽団首席チェロ奏者)とのコンサート「ピアノとチェロで語る『ブラームスとクララ・シューマンの愛』」を、名古屋市中区の「宗次ホール」で行う。同コンサートを前に6日は、日頃の研究成果を学内で学生や教職員にも聴いてもらおうと企画された。演奏曲はブラームス、ショパン、ラフマニノフ、ピアソラの楽曲からセレクト。

編集後記

学内の紅葉も一段落して、次第に冬の風景になってきました。穏やかな季節と思っていたら、11月後半も学内外で様々な動きがありました。中でも30日の「第1回アカデミックカフェ」には、中学生から、化学・物理の専門家まで、予想を上回る多くの参加者があり、担当したスタッフも嬉しい悲鳴を上げて対応。大学が広く開かれた“学びの場”だなあ、と改めて実感する機会になりました。“難しいことを分かりやすく”伝えるアカデミックカフェになればと、次回の企画を練り始めたところです。(K)

投稿のお願い

学内外の出来事(教育・研究・地域連携・国際交流・学内事業など)に関するニュースの提供をお待ちしております。

メール: kouhou@m.auecc.aichi-edu.ac.jp 編集責任者: 総務担当理事 折出 健二